

## ナウマン象の模式標本

池谷仙之\*・野嶋宏二\*\*・田中源吾\*\*\*

### 地学散歩(66)

ナウマン象は第四紀の中・後期(約30-1.5万年前)を代表する示準化石であり、これまでに日本列島の約200カ所から1000点以上の骨格標本が産出している。このナウマン象は、1921(大正10)年に浜名湖畔の佐浜から産出した左右第3大臼歯(写真1)を完模式標本として、1924年、榎山次郎(京都大学)によって *Elephas namadicus naumanni* と命名された(現在の学名は *Palaeoloxodon naumanni*)。“ナウマン”象という名前は、日本の地質学の発展に多大な貢献をしたドイツの地質学者であり、東京大学の教授でもあったエドモンド・ナウマン(Edmund Naumann)に由来する。模式地からは、さらに右切歯(写真2)および左右上顎第3臼歯(写真3、4)の副模式標本も産出しており、これらの標本は同一個体のものとされている(標本の部位については図1を参照)。

佐浜町沿革誌によると、これらの標本は次のような経緯で発掘された。「伊左見村佐浜の山下高三郎氏の所有地において、大正10年6月10日につぎのものが発掘された。このうちの1個(写真1)は大顎付きで、3貫963匁、他のもの(写真3、4)は顎骨はなく、重さは1貫800匁であった。牙2個(写真2は2つに割れていた)は合わせて長さ6尺5寸で、太いところのまわりは1尺8寸4分、重量は13貫600匁であった。このマンモス(当時はそのように考えていた)の発掘物は京都帝国大学理学部地質学教室に寄贈された。同教室より高橋、松村助手が6月15日に当地に出張し、また、円越助手も6月18日に来訪した。さらに、6月20日には、小川琢治理学博士(湯川秀樹博士の父)が訪

れて10日間佐浜の地質や地層を研究した。この10日間は一般人にも観覧させたので、近村の学校職員や団体生徒らが毎日数100人見学に訪れて、にぎやかであった。」

模式地佐浜の近辺ではこれらの標本以外にも、これまでに10頭分以上のナウマン象化石骨が発見されている(写真5~7)。この模式地は現在も当時のままに残されていることから(写真8)、発掘調査によって、追加標本が発見される可能性が高い。

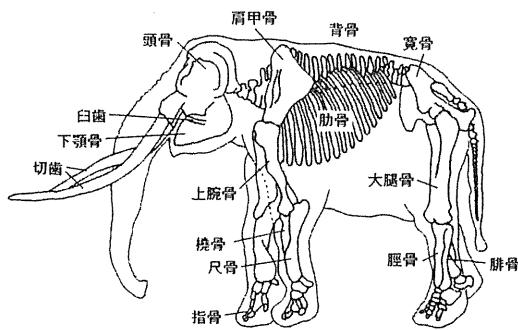
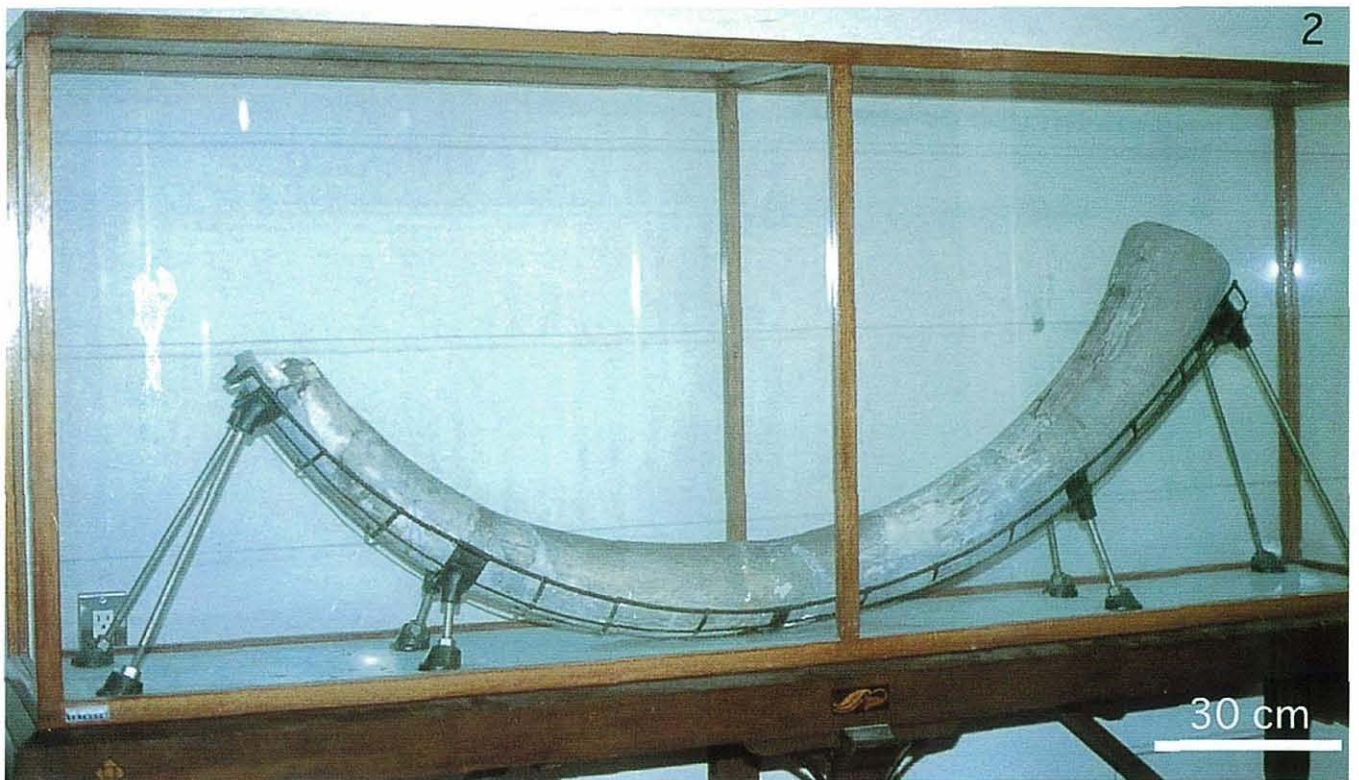
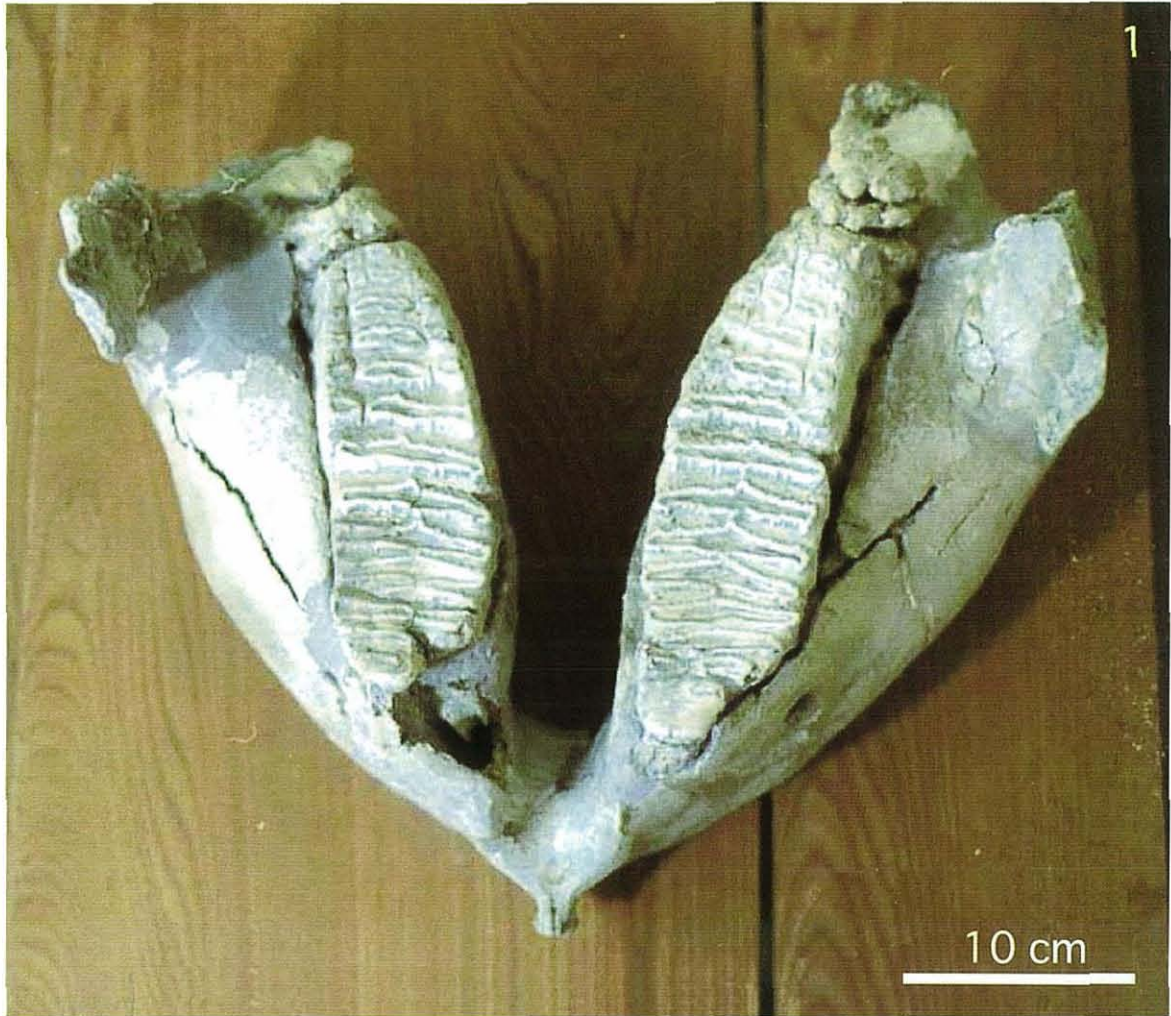


図1 ナウマン象の骨格

\* 静岡大学理学部生物地球環境科学科

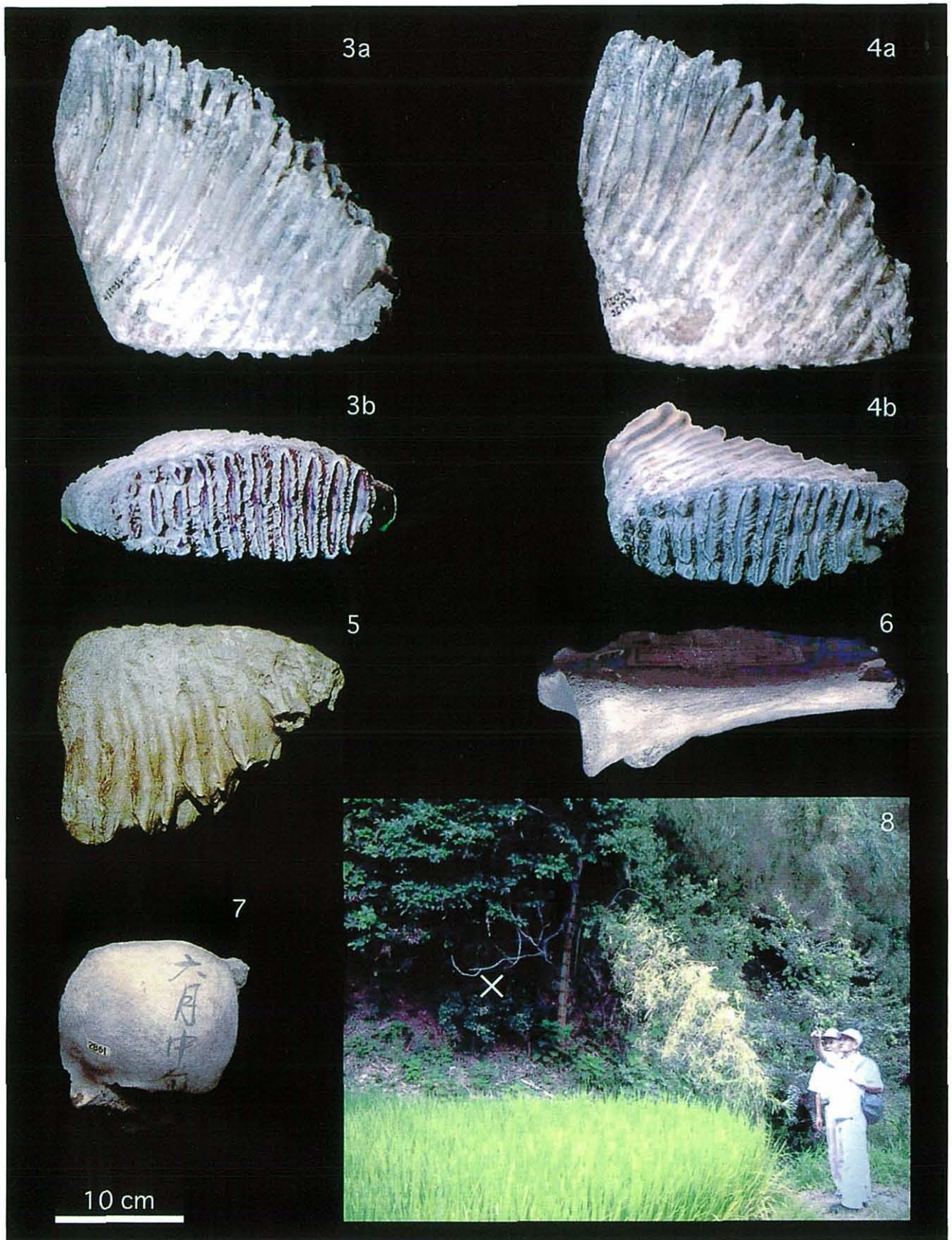
\*\* 静岡大学大学院理工学研究科

\*\*\* 静岡大学理学部



ナウマン象の模式標本（京都大学所蔵）  
1：完模式標本（左右第3臼歯付き下顎骨）  
2：副模式標本（右切歯）





3 a, b : 副模式標本 (左上顎第 3 臼齒). 4 a, b : 副模式標本 (右上顎第 3 臼齒).  
 5 : 内山標本 (右下顎第 2 臼齒). 6 : 明治 17 年標本 (右尺骨). 7 : 大正 6 年標本  
 (右大腿骨關節). 8 : 模式標本産出地点 (×印).